

うという、毛主義者のいつもの企てと必ずしも同じではない。あらゆる点からおして、このキャンペーンは、国内の状態に不満な者に対する大規模な政治粛清をおこなうための一種のカムフラージュとして展開されようとしている。

周恩来は、1973年8月の中国共産党十全大会への報告のなかで、「林彪反党集団は一握りにすぎず、全党、全軍、全国民のなかで極度に孤立しており、大局にはなんの影響もない」とのべた。

ところが十全大会の1年半後の1975年2月の紅旗誌けいさいの論文「プロレタリア独裁の理論をしっかりと学びとろう」は「林彪反党集団は1つの階級であり、その集団がつくられる階級的な根と社会的基礎があった」とまったく正反対のことをいっている。

姚文元論文や中国紙の他の資料がはっきり示しているように、毛沢東グループの最大の悩みの種は、「文化革命」とその結果や政治・経済の不安定、中国の軍国化に対する国民の不満の声である。

そこで「7、8年過ぎてもまだ文化革命を理解しない連中を見つける」ことが、当面の重要課題にかかげられている。新キャンペーンの展開にかんする「毛沢東の指令」に述べられているとおり、こういうやからを「労働者階級のなかや党員の一部のなか、プロレタリア階級や機関の工作要員のなかから」探し出さねばならないのである。

不満分子の「探索」はすでに始まった。そして誠実な党員や勤労者を迫害する波がまた1つ始まった。新聞報道によると、そのために「社会調査」のグループや隊がつくられているという。このような名称の裏に何がかくされているかは、「文化革命」の経緯が示している

(APN)

8年ぶりの北京の印象

東京外国語大学助教授 中島嶺雄

<脱政治ムードの北京>

私は今年の1月からモンゴルから中国へ入境し、集寧—大同—張家口を経て8年ぶりに北京に入った。8年前の文化大革命当時に比べれば、北京は非常に落ち着いている。服務員の態度なども、かつての“わざとらしい親切さ”はなくなって、われわれが見ていようといまいと暇があればトランプに興じている。また、どこを見ても毛沢東語録を読んでいる様子などまったくなく、「批林批孔」運動を学習している光景にも一度も出合わなかった。そして中国の変化は汽車の沿線からも感じられた。第1、スローガン—毛沢東万歳。中国共産党万歳がめっきり少なくなり、明らかに塗り消されたあとさえみえる。「東方紅」であるとか、

「大海航行靠舵手」とかいった毛沢東讃歌もほとんど耳にしない。

北京の市内の雰囲気は、明らかに脱政治で、かつての紅衛兵はいまやたんなる模範生であり、いわばボーイスカウト、ガールスカウトのようなものになっている。街の目抜き通りは確かに美観があり、市場の商品も豊富で、自転車なども新しいものが増えている。北京の近郊農村には至るところで耕耘機が動いていた。着ている人民服もこざっぱりしてきれいなものになっている。それと同時に、8年前には見かけなかった手鼻をかむ人、痰をはく人が違法多くなっている。自動車の増加とともに、香港の街角のように交通道德が乱れ、交通事故も増加している。つまり北京の表情は、すべてに平常化し、同時に「政治第1」、「政治突出」という雰囲気はまったくなくなりつつあるという印象を受けた。

しかし、同時に北京にはもう1つの表情がある。まず街の表情にしても表と裏があるわけで、その裏街表情と表との断絶は極端であり、発展の遅れは相当のものである。

私は今回、その裏街にも何回か足を踏み入れた。例えば、北京駅は大変立派だが、その駅前の朝陽門南小街だとか、前門外の小路だとかは、いかにも古く、きたなく、共同便所の匂いありで、強いショックを受けた。

招待で訪中するおえらいさんが、北京飯店に泊り人民大食堂で要人と会い、万里の長城、明の十三陵、一、二の人民公社等を回るというおきまりのコースをたどって、そこだけからみれば、確かに中国は労働文明社会というようなことになるかもしれないが、むしろ素顔の中国は、中国自身が知っているように、まだ完全な発展途上国なのである。

こうした断絶は、何も街の様子だけではなく、例えば、人民大会堂で今回も繰り広げられたあの政治的なドラマの世界と、一般大衆レベルの世界とのあいだにも横たわっている。

< 中南海一帯は厳戒体制 >

1月13日から17日までの5日間、人民大会堂で開かれた第4期全国人民代表大会(全人代)は、事後知らされた。

ところで、一般市民にとっては、全人代といっても全然別の世界のことである。憲法が制定されたからといってそれを信じて読む民衆が一体何人いるかということを考えると、日本の新聞は相変わらず大騒ぎしたが、中国において憲法とは毛沢東も知っているように「根本的大法」なのであり、むしろ一種の政治的な宣言にしか過ぎないのである。第1、「人民日報」などを読む人も300人に1人ぐらいなのだから、「批林批孔」運動といってもその「人民日報」や「紅旗」だけを見ているとなにか中国全民衆のものであるかのように錯覚に陥るが、そんな雰囲気は全くない。最近ではこの「批林批孔」運動の論調がきわめてスコラ的な瑣末主義になり、当初の性格を大きく変質させてきていることも事実である。

もう1つ現象面からいうと、例えば、北京では今日でも博物館類は一切立ち入り禁止であ

る。革命博物館、歴史博物館、軍事博物館、中国美術館、北京図書館など……。さらに北海公園、景山公園、なども立ち入り禁止であり、北海にかかる橋には全部鉄柵がしてあり、番兵が30米おきに立っている。これらのところから毛沢東らが住んでいる中南海が見え、あるいはそこに隣接しているからには怪かならない。こうして現象面を東京にたとえれば、皇居が中南海とすると丸の内のビル街、日比谷公園といったあたりが全域にわたって立ち入り禁止で鉄柵がめぐらされ番兵が立っているというふうに考えてよい訳である。もし東京がそうであるとすれば、たちまち世界の大ニュースとなることは間違いない。ところが中国となると、肝心のことが何1つ日本に伝わってこないという現実がここにもあるのである。

こうした中国社会の断絶、2つの顔、素顔といった辺を十分に弁えた上で中国のことを考えると、今回の全人代がもついろいろな問題が自から判明してくるのではないだろうか。

<迫力のない北京からの報道>

私は北京滞在中、幾つかの状況証拠によって全人代の開催が迫っていることが分かっていた。

まず第1に、モンゴルから汽車で国境を越える時は、1等寝台車が1両しかなかったのが、それが北京に着いた時は2両になっており、それには地方幹部らしい人が沢山乗っていて、北京駅頭に降り立った。そして北京では日本大使館を通じて、香港代表が既に来ているらしいということも耳にした。さらに民族飯店の日本商社員の引っ越し、友誼賓館への地方代表の入館——これは私の教え子や友人たち日本人常駐者の話しから分かったことである。人民大会堂の周りの番兵の増加。さらに外国人はほとんど行かない旧鼓楼大街には“第4期全人代の開催を控えよう”というステッカーが糊あとも生々しく貼ってあった。こうしてみるとやはりそこには何かあるぞ、と考えざるを得なくなる。ところで北京特派員の方々には私の友人も多く、今回もいろいろお世話になっただけに、一寸申しあげにくいのだが、私が鼓楼一帯を歩いてきて、右のようなステッカーを見つけたと話すと、ある日本人特派員から「鼓楼ってどこにあるのですか」と質問されたのには驚いた。

もっとも北京特派員のあり方がいろいろと批判されがらだが、確かに気の毒な点もある。例えば、全人代についてもこれまで何回となく報道しては裏切られているので、またかといった感じがある。それに一般に取材は困難なのだから、自分の足で情報をとることをだんだんしなくなり、また歩いても情報がとれないという実情もある。

従って、特派員も、自然と日本人同志の付き合いに限られてくる。それに若い特派員でも立派な家に住み、お手伝、コック、運転手、助手などを雇っていて、何がなんでも自分で情報を得るんだという努力をしなくてもよいようになっている。とにかく労働力が豊富で安く、平均賃金は月6、70元であるが、日本人はその倍額近くの120元から150元、つまり

2万円前後も払って雇ってくれるのだから、先方も喜んでその雇用斡旋を全部外交部がしてくれるわけだ。

こうした状況下にある北京特派員は、モスクワ特派員に比べてみても、どうしてもギリギリの切迫感、臨場感に欠けることになる。モスクワの場合はおおむね反体制的な視点に立つ記者が多く、常に現体制に対して“突っ込んで見てやろう”という精神が漲っているが、北京の場合は、「中国の偉大さ」に心服している記者が多いので日本の読者の疑問を代表して問題点をうがってゆこうとはしないのであろう。その辺のところ、ある意味では、日本でいわれる中国報道の問題点となって出てくるのではなかろうか。

＜文革派と実務派との妥協＞

第4期全国人民代表大会は、結論的にいうと、毛沢東以後への移行期にふさわしい暫定的な体制が確立されたとみることができよう。もちろん新憲法を見る限り、文革路線が散見でき、そういう意味では文革派が「名」をとっている。しかも毛沢東を頂点とする党の一元的指導という形式的縦割り制度によって、国家機関が党の中の一行政機関となってしまった。しかし、こうした縦座標に対して、意外にも実際の人事においては、明らかに復権した幹部たちが大きな壁をつくっている。つまり、そこに実務派官僚の大きな壁がある。

しかし、ジェロントクラシー(老人支配体制)の問題も未解決であり、建て前上、毛沢東にすべての権力が集中してしまっただけに毛以後の問題が依然として大きな問題として残った。

にもかかわらず、昨秋以来、「批林批孔」運動は実質的に変質した。この運動はもともと路線闘争であり、政治権力闘争的な色彩をもって発足したものであったが、それが変質し終熄しつつある原因は、そこに1つの凝集力が働いたのである。その凝集力は何といても毛沢東の高齢化、周恩来の病気といったところから出てくる将来への不安がもたらす暗黙の合意である。もう1つは、「開かれた中国」への外圧がひたひたと押し寄せているという点も見逃せない。もともと現在の体制は、こうした一種の妥協の産物であって、経済建設のウェットがいかにか大きいかというところからくる実務派体制である。従って「実」は実務派グループのものとなったといえよう。

とはいっても、今回の体制が、一部でいわれているように毛沢東の権威の大幅な失墜を意味するものとは思われない。毛語録は読まれなくなり、毛の老齢化は拭えないとしても、中国人自身が毛の権威の翳りを感じていない。つまり、毛の老齢化にもかかわらず、あのカリスマ的権威は依然として維持されているのであり、そうした点を十分承知の上で非毛沢東への道を徐々に進めているのであろう。少なくとも周恩来はそういうふうに考えているかもしれないというふうに考えておくほうがいいのではないか。

とにかく現在の中国には、2つの断絶した世界があるが、全般的には文革的、政治第1的な雰囲気は去り、経済建設が中心になりつつあるといえよう。

(講演要旨マスコミ文化誌4号から抄録)

<資料>

モンゴル史の偽造との闘い

モンゴル ウネン紙論説委員 A・チョイシルジャブ

ソ連 ブラウダ紙ウランバートル特派員 V・シヤロフ

モンゴル史上の多くの事実が今日、激烈なイデオロギー闘争の対象となっている。北京の歴史偽造家は反動的なブルジョア“研究家”と結託してモンゴル史を書換え、モンゴル人民共和国やソ連中央アジア諸共和国の領域、その他の諸地域にたいする領土要求に“学術的基礎”を与えようとしている。

歴史偽造者たちの筆にかかると、モンゴル史は中国史の添え物以上の何物でもなくなる。

中蒙関係はゆがめられ、モンゴル人民共和国の非資本主義的発展の経験は否定され、社会主義建設におけるモンゴル人民の成果にドロをぬる試みが行なわれ、ソ蒙友好に低労な中傷が加えられる。

モンゴル人民共和国のイデオロギー戦線の活動家は、北京の宣伝にだんこ反撃を加えており、歴史学者もこれに大きく貢献している。

ウランバートルで開かれた第2回モンゴル学者国際大会(1970年)と“中央アジア文明における遊牧諸民族の役割”国際シンポジウム(1973年)で、モンゴルの学者たちの声は権威と説得力をもって響いた。B・シレンディフ、S・ナツァグドロジ両アカデミー会員、S・ビル、N・セル=オジャワ両博士その他の発言は、反マルクス主義的な考え方に手痛い打撃を加えた。

北京がその理論的武器に採用した彼らの考え方のひとつに、3000年以上にわたって中央アジアに住んでいた遊牧諸民族が人類文化の創造に加えた貢献を否定する考え方がある。モンゴル族は物質文化と精神文化のすべての果実を中国から借用したのだというのが、その結論である。

A・P・オクラドニコフ科学アカデミー会員の指導下のソ蒙合同考古学調査隊の13年にわたる活動は、このテーゼが成り立たぬことを納得のいくように示した。モンゴル人民共和国領内で発見された農耕文化の跡は、独自に発生したもので、中国のそれとは根本的に違っている。遊牧諸民族の精神文化の独自性、遊牧諸民族と隣接諸民族との間の複雑な相互関係

週刊中国事情研究

WEEKLY BULLETIN OF CHINESE AFFAIRS

毎週月曜日発行

購読料 半年 12,000円
1年 24,000円

振替 東京 184758
発行人 浅野雄三

昭和49年2月2日第三種郵便物認可

1975年3月24日

(第78号)

◇◇◇ 目

次 ◇◇◇

中国、覇権条項で強硬姿勢 わが国の自主外交の試金石	2
プロレタリア独裁理論学習運動は 新らたな政治粛清の煙幕 タス通信論説委員 M・ヤコブレフ	4
8年ぶりの北京の印象 東京外国語大学助教授 中島嶺雄	5
<資料>	
モンゴル史の偽造との闘い モンゴル A・チヨイシルジャブ ソ連 V・シヤロフ	9